

## 未年の弁

### 1931年の羊

大橋秀雄(機械)

羊→草をはむ→大草原→モンゴル→ジンギスカン→焼肉。

羊→毛糸→ウールマーク→純正→純なま→ビール。

もう一度試みよう。

羊→ふわふわ→マシュマロ→真っ白→銀めし。

\* \* \*

羊をめぐる連想を試みると、なぜか食べ物にたどり着く。1931年生まれの羊は食べ物に対する潜在的固執があるらしい。サンプル数1で一般化するのには暴論かも知れないが、この年の羊は確かに食糧難時代の落し子である。

敗戦の年1945年は中学2年生、食べ盛りであった。廃校になった東京陸軍幼年学校から新潟県の山あいの中学校に転校したのもこの年である。農村地帯でもあり、食べ物については都会の仲間より少しは恵まれていたかも知れない。それでも、確か高2の頃だったかと思うが、本物のバターを塗ったトーストを初めて味わったときの感激は忘れられない。“秋深しトーストにバター厚く塗り”いつ覚えたのか、今でもパンをかじりながらこの句をふと思い出す。駅弁の蓋についた米粒が気になる世代の真ん中あたりにいるのだろう。

古いの本によると羊年生まれはおとなしいと言われてい

る。私自身はまったくその通りだと思っているが、おとなしい人は羊年以外にも沢山いる。干支の順序によると午、未、申と並んでいるが、そこに性格の連続性は全く見られない。性格や興味は、むしろ生まれ育った時代の背景に色濃く左右されるのだろう。一回りあとの1943年生まれの羊に連想ゲームを試みると、どんな結果がでるだろうか。おそらく全く違った潜在固執を示すことになるだろう。

60歳定年制には、干支の制度が巧いタイミング役を果たしてくれる。5回目の年男は即定年への晩鐘であり、撤収を急げとの警告でもある。4回目の年男を迎える頃は、気力体力を合わせた総合的な実行力が人生のピークに達する時期である。同時に、新しいテーマと本格的に取り組むにはそろそろ最後のチャンスですよと予告する。3回目の年男はまさに壮年の入口を示し、一人立ちの力量が試され始める時期である。

私は、2回目の年男は駆出しのエンジニア1年生として迎えたが、3、4、5回目は母校東大で迎えさせて頂いた。あまり外を知らない羊である。まもなく永年住み着いた囲いの外に出なければならぬが、ストレイシープにならないよう今から気をつけよう。